

■三軒家(さんげんや)

延宝3年(1675年)に出された、大坂の名所案内書である「芦分船(あしわけぶね)」によると家数の少なから「三軒屋」と名付けられた当地も「次第に人家が満々(みちみち)、軒をならべ繁栄して、旅泊の船出入繁(しげ)く」としており、「芦分船」が発行される少し前の明暦3年(1657年)には当地での「川口遊里」が禁止されるまでになっています。

貞享元年(1684年)に天満組替地(てんまぐみかえち)となり、当地の一部は大坂三郷(さんごう)に入りました。幕府の「木津川口遠見番所(きづかわぐちとおみばんしょ)」や「御船蔵(おふなぐら)」が置かれ、摂津名所図会(せつつめいしよずえ)にも「千石・二千石の大船、水上に町小路を作りたる如く舳先(へさき)には船の名、家々の紋付けて其国をしらせ、風威の順不同・潮時の満干を考えて出帆あり着船あり」とし、薩摩(さつま)(現鹿児島県)・日向(ひゅうが)(現宮崎県)船の着船の記録も見えます。北国航路の和船係留地であった木津川には和船が1000艘以上にもなったので、明治14年(1881年)には三軒家川を開削、「船囲い場(ふながこいば)(178,000m²)」を現在の三軒家東3丁目に開設しました。その名残りが今もあります。

(江戸時代には「三軒家」は「三軒屋」と表記されることが多かった。)

■近代紡績発祥の地(大阪紡績)

明治16年7月に、東京・大阪の実業財界人渋沢栄一(しぶさわえいいち)や藤田伝三郎(ふじたでんざぶろう)らが出資した大阪紡績会社(通称:三軒家紡績)が、当地「三軒家村」で操業を始めました。この大阪紡績会社は大正区の近代工業を飛躍的に発展させ、大阪の紡績業を日本一に押し上げる原動力となりました。

三軒家村は古くから船着場としてにぎわい、石炭や原料の綿花の搬入や製品の運搬に便利のため選ばれたといわれています。

操業間もなく夜業を始めましたが、明治19年に発電機を購入し、初めてあかあかと電灯がともり工場全体が不夜城のように浮かび上がり、各地から電灯の見学者が殺到しました。工場はまたたく間に拡大発展し、業界に傑出した地歩を確立しました。

明治20年代には、当地を中心に数多くの紡績、繊維会社ができ、日清戦争から日露戦争時代にかけて大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれるにふさわしい発展をとげました。

その後、大正3年、昭和6年に他社と合併して世界最大の紡績会社に発展しましたが、戦争激化とともに軍需工場に転換させられ、昭和20年3月の大空襲で焼失しました。



『大正区ホームページ』から転載

